徒然草

下

和書門
特別
類
二六七二一
號
第六十一番
函
二
冊
架

雜部

内閣文庫
番號 和 26711
冊數 2 (2)
函號 特 61 9

国立公文書館
National Archives of Japan

花ハすゑのつゆに月をやどしてのこ
るものはなかりけり。月ばかり
こそはるのものなれ。
春ハ惜しむ——ぬも。
なほ春ハ惜しむ。涙ぬぐはぬ袖
ちかきおれ。新古今ハ春ハ
なほ春ハ惜しむ。このこと集がきすま。春
ハ
ものかはるにすまやゝ春ハ
ゆくとも。はるゝゆゑ
ゆくゝまゝまゝで
なほ春ハ惜しむ。ものゝあはれ
ゆくとも。はるゝゆゑ
ゆくゝまゝまゝで
ゆくとも。はるゝゆゑ
ゆくゝまゝまゝで
ゆくとも。はるゝゆゑ
ゆくゝまゝまゝで

ニてのぶ〻ひハ市ゑるゆきどゝ。おゝた
ゝ〻ゝる人ゞゆ比枝のの枝ちゝり
ゝゆ。そハんニふまゝ〻ゝまどはいゆゆる。ゆ
のうゝゆ始終ゆうゝおゝ〻ゝゆ。男女お
情をひゝへにゝ毎ゝるゆどゝゝふ相のゆ。
まゞゞやみゝ〻ゝうはをゆひゝあゆる
奥をゝこゝち。ゆ歩ひゝわあゝゝ。
をゝきゆゝ井をおゝゝゝやう。ゆ茅ゞゆど
おゝ〻ゝを〻ゝのぶこゝを。ゝゝこのむゝと
いゝゆ。を月のゝをゝゆゝゆ里ゆゆ

まゞゝゆどめゝゝるゝゝゆゝ。ゝゝゆ。ゝゝのゝゝゆて
ゆいゝでゝゝゝ

茶は茶碗にうちそそぎ。奥へ入ること。
しばらくあり。ようすを聞に。
ひとへにもゆるはなはだしみみ。
はなはだおつかなし。こゝのもとの人こゝろ色
こゝろ美はもて興ずれば。茶のおもはず
ひとちよりうちよりよりあのゝめとそびさま
ひとゝ。酒のみ連歌して。そはおのゝ
ある殿ゝ。おのゝ奥まいりあり
はひ。ひとゝ。當るまおゝとちゝ路
ひけまど。ようづの物。こゝそなたゝ。ゆ

あり。はやうお人乃祭のしゝはなり。はも
めづらしうまうきんぐ。はもまうしゝ。
なぐ。樹お不用まうして。おゝなる屋すて
酒のみ物こゝ。囲碁奴さまであうび
ゝ。樹番する人まて。ゆゝまば。わゝわ
はなはるゝはふ時。名所つぶおゝやうに
おゝうゝ。さうのぐわて。茶ぬべきまぐ
簾りうおゝまゝ。あれて。つるみまゝ
はぐゝはなだはゝゝ。あわうりとぬぐも
まりて。ゆかゝ。又わゝゝ。なぐ

といひてやがぬ。たゞ紙をのべて人々にうた
をゆべ――。赤の人形を、――ぞをれば。
腰をいとも丸びわ〳〵すの花ぐるま
は。おづのへよりもちの人形をうつ――ろにさ
〳〵るを。はをまあ――〳〵をよびかし
ぶぶ。ゆかをまつ人々と。人もまる――。
何とをまつ蓋のもわ――をまめう――
をに。のハをれぬ行ぶをのびてをとる車
どもの糸――糸をたれわ〳〵れのをど
忘れるをまの糸バ。手匂下部をどのみし
をるをまを。あ――〳〵〳〵〳〵〳〵
をはをぐ――より引をまはをぐ
ゆ――。をるをおどをまい。〳〵をべつる車
どもにを〳〵をみぬはる人と。いづゆ〳〵へろ
ゆきつ〳〵ん。おどをまを〳〵おれをはて。車
どをの産うぶり――さもをみぬをまを。簾
たゞをまを。をはりの自分をまをさび――
ぶにをまゆゆくをまを。世をたゆ――も出
を〳〵れく表をれ。人形人たること。祭人
をるをまをいハ。ゆ林の人をまを〳〵行

ふ人のかの　われるぶ　ぶ　ものつ　つ　すぶ　ぶ　ぶ　

ぬれど。又こゝろぞゝめ川ば。ぬるとまあ
なりにぶれものゝまぎれさよ似さか。兵の
軍みおらば。死うち駆ることを去て。
あまとまりまを主人なきわまう。世とそむ
けるその庵ゝ。ゝ系に次石をとてあう
ぶ〳〵はこば勝にはやと思へらば。ぬるまう
ま〳〵。きづちるひ形奥。先岩のかゝま
きふれをゝ〳〵ばゝんや。をゝ死ものぞめる
る。ゝゝさの体ゝ。ゝゝめるまあるで
塗ゝぬまば。陰の芦ゝあゝとゝまかとて。

主人のゝ山巣をほとあゝゝゝゝ侍ゝ
しば。女もゝ芦ゝ侍ゝ。ゝまま
人のゝ主ゝるゝゝまば。ゝゝべまゝ
おりれしかど。周作内侍ば
ゝゝれしばまかれゝまゝいまゝ女ゝ
みまゝ芦芦乃ゝまゝ巣まゝかゝ。ゝゝめる
ま。毋屋のゝ巣ゝ。芦ゝのゝゝりゝる枝巣を
よめゝよ。ゝの巣にゝかゝ。ゝるまゝ歌
おゝゝばまに。ゝまゝゝまゝまゝて
ゝゝ乃ゝはゝゝゝ侍ゝ桃巣まゝ

[illegible]の物がたり新井白石の
[illegible]こと。いみ〳〵しう出たるが
[illegible]。鴨長明のゆく事[illegible]
[illegible]。後[illegible]あり。[illegible]
[illegible]。とのれとう山[illegible]
[illegible]〳〵ごたうある。名
殺[illegible]〳〵ごとに[illegible]
[illegible]。性にうゝれる
[illegible]。九月[illegible]九日[illegible]
[illegible]へて[illegible]
とゝへば。ちうぶは[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。

さかうへぐすもあわるん。蓮ばくらえ
まず。刹一の花きさるもつ。
梅は白きうすお梅。ひらへちゆず〳〵咲
たるも。のさきちるおお梅乃ようひめで
こまもみおおり。まうき梅ハ。ゆ〳〵発よ
ゆたあてゝ芝〳〵をりをゆれて。枝
ようだこつきさるふうし。ひとへるず。
ようづさきてちかるハ。ゆ〳〵おらして。
京極の道中ぢそハ。ようひとへ梅をちん。
軒ようへ〳〵きさうふけるこお梅乃屋

乃南ぢをよ。そも二ぬ伝るめち。梅又お
う。如月ばちのやう〳〵えですぐ〳〵美
のもおをまをゆうて。めで〳〵きものや。
さら花ようこゝれまを赤ハ物みち大きる
ず。ゆハ山ゆ梅社ゆるようよるでしこ。池よ
ハ蓮。秋のまハ萩ようと。ぎちう萩
ぬ乃。ようぢ〳〵ゆをに。われもう
かるうや。ちんどう美。黄菊も。〳〵
ぢ紅葉。いづきをてたら〳〵発ず。ゆ〳〵
やのまゆ梅ず。〳〵ぞのぬよ〳〵花か

汐ゆにおれとる物ゝ
ゝ。あとのれまれぬ
かぶ。おかゝひまも
ぐき物ハ。ゝゝ人の
ま。はやうのまま
ゝ死して財殘るハ
ゝゝぬ物。ゝハ
ゝ物ハいとあけ
ゝおゝる。ものして
えめまゝふものゝ

ゝゝはゝ。ハ
ゝ。ハゝゝん
夕まゝかまゝば
か何もゝぞ
悲田虎蓮上人
ゝとやはうまの
の事ゝ物ゝ
ひはるハのゝ
うものゝゝて。
重ゝハゝ

ゝはゝ。ハ
ゝ。ハゝゝん
夕まゝかまゝば
か何もゝぞ
悲田虎蓮上人
ゝとやはうまの
の事ゝ物ゝ
ひはるハのゝ
うものゝゝて。
重ゝハゝ

赤ん坊〜〜泣て。おれ〜〜ん泣るに。人
の心をもまどはさんと。泣〜〜び。まべて心
やり〜〜て。情あるゆへに。人殺しふびんの
る。たゞけ〜いまんがさんて。ぶえいひ
よれこび。心よな〜〜こうけしつ。はもん
とは思ひもど。ゆこもも〜〜らおぬ人のこ
あれば。おのづ〜〜おいとおぬうあの
ゐるべし。あづま人い我ゆ〜〜まれど。ぶだい
泣人久ゆ〜〜。情をこれ。ひとへよまぐ
よのあるものなさば。あづめよおいなど

いてやぬ。ぶあいれゆうまれぶ人まい
このやゆ〜〜ぶ〜〜と。こと〜〜ふ〜〜き泣し
こゑ。こゑひぶ〜〜ゆ。ゆうらゆぶみあ〜〜く
〜〜て。墨教のあ〜〜ゆゆまることいりいと
ゆまゆへぶもゆと。ぶれしよ。此〜〜ぶの
陰いよ〜〜ぶて。おおゆまるゆに。ゆまも
泣ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ。ゆ〜〜ゆ〜〜ぶ。ぶるゆぶて。
も。ぶまゆあるよこうと。ぶと泣泣
ゆゆ〜〜と。ん。ゆるゆ。ゆまゆ〜〜ふ
ものゆ。ゆる。ぶ。ぶゆのまうろ〜〜げゆ

が。おくへ。あひて。清子はおたけやとくに
しに。ひとりもちて。借ゝずまを。芸しう
ば。さて。世の表ハ。ふたりはなれ。情をまう
いすぐものしらん。ふもなろう。
されにこそ。筆のあはきに。思ひきる。れ。
とりこれ。さまあぬべするや。眞
妻乃とさまゝでハ。ふるものゝ。いう。義
悲あうちんや。孝やまを。芸ゝ。子
もらてあう。親の志ハ。おりこれ。なるを。世と
ひそう人ゝ。ようづりする。ものゝ。

あべておゝ。ーおかるる人。芸。筆。うへ
つゝひ。ものる。家のを。ふて。世下に。ものに
ふすハ。降るや。ものゝ人。ハいよ。ばて。おりへ
ば。深に。悲しゝ。ゝんおやのゝめ。妻すの
ゝ。ものあすを。恥をまれ。ぬまみ。もーつべ
ゝ。ものるや。ゆれハ。盗人。ものゝ。ものあひ。ものゝ
をのゝつみ。ちんよりハ。世の人の。織び。宮
ゝ。ものやうよ。世をびおこ。ものをすハ。ーき
や。人。恒の。庭。ものゝ。ものゝ。恒のハ。ものーん。
きハまうてぬをみよ。世おさ。ものびーて。

陳餐のゐまゝにあるべし。ゆゑの未孫べきゝ
ぶ人をゝゝる去め。法をまもりはゝ。そもま
ばつみをりんず。不後世ゆ。はゝ
ゝゝ——て人を恵むべきとあらば。上形
おごりつゝやまにはやめ。民ぶまで世を
をしゝめば。不ようあんず。疑ひをのべ
のゝび。衣食言葉をまもるうへに。ひがこと
なん人をぞ。おゝ〳〵ぶ盗人といふべます
人ぶ強馬のまゝはゆまの。いみぢうゝ——
ゝうをあ。人のゝゝるをもあ。たゞつゝ

——てみぐれずまいぐ。ふすゝかゝゝぶ。
をゝの学ぶ人はあやし——ゝゝ。あるおば
ゝゝあつ。ふれしゝ。ゝゝ。ゝをみるすひ。
をのれがこのむゝるよかあ。あゝ。そゝ
人のゆをぶむゝあるあずから。光ゆき。
比大ゝるハ權化の人をはぢたべかゝぶ。波
学の士をあゝるべゝゝび。あのをゝ名ぶ二三
をゝハ。人のあやまるべのゝび
柳尾法上人道をゝゝ。はゝて馬
あゝふなのこ。あゝ〳〵とひゝをば。

上人ちとまゐて。あまをうと申。宿坊開
發の人おのおのしと唱るぞやあまを
人のつるぞあまをよさうと〳〵芸者るを
見ねとゝ申ば。府生殿の馬はと芸
々。こはめで〳〵きるの所何字なれはは
こゝあまれこう神——家殺縁まを出
つるつをして。國侯なのごゝをまるとゞう
ゝ申まゝを船ゝ西の下野のを信形
を。為るのおあるんや。能こてを〳〵形
ていれはるをつをを出しゝゝゝ出るを

よ。信濃馬ようを為てし乳ゝ〳〵。道に出
じぬる一云。郎のごとしと人思へり。さて
いかゝる相ぞを人のゆゝれば。まいめゝ者風
をして。保安乃るとゝ好しゝゝ。此あを
を信やき。いつゝを人やゝ。濃さるとぞ云まる
四宮屋を。相去にを通て。なのを
ゝる兵は孫雄やあるとゝ為ゝ〳〵ば。お
人濃をゝおおゝ——ますとやゝ。ゝゝまる
おぞと為ゝれば。信濃宮のをゝまおを
ゝ——ますすを出を丈をゝうゝまを

まぶのしるしとしてづつの形あり。是既まで
あやぶまれざるしるしあり。とかくに
して矣にあらずうるはよりくり
矣治あまるにはにぶやまぶ。神るおた
ぐまありといふうつ。よろく人はいとお
とるまの格式おまみしずとぞう
やや中以後の人まよ。矣とあへて三里ばや
のぶまぶ。上等のるまあまあ矣をべ！
庚茸と鼻まあく嗅ぐべ。ちいはた
出るて。鼻よりのて脳をむとへて
鼻ばうんをする人。よく抱ばんぶはい
おすいよ人に去れ。ばうらくよく
面ひえて市出るんこそ。ほいまく
のくめと常よりふめれど。のくうふ人の義
も命ひうること去。いまぶ空国
めくおるよか上人の中にすぐりて。
駅りわくくすま恥ぶつまぶるて
嗜む人。天性を骨おたぶ。そよ
おづのびぶすりまぶ。ーて。自然は
きば。堪能のくーなやばるよかぶに

上ものの道にいたりては。人をゆるさきて。奴あるを名とうるうるうや。天下万物の上をとゝへども。始は不揃のきこゝもあり。元下の服理とあり。きれども。是人道のなまてたぐ〳〵。是をもゝ〳〵て教導をざまぐ。世界りっぱすて。第人お所とあるる。法とのみるべ〳〵。第人の云。人生五十にあるまで上をおい〳〵ばん義をあびぎ也。げみ習わべ。義り来も所〳〵。老人のるをば人まえわ〳〵ぶ者。衆よ少りさるまあ〳〵。是ぐるし。大ゝ。第の主ぐらかあて。地あこゝろ。やまを〳〵。あ〳〵ま〳〵〳〵。世俗のるよ教りて。生涯をゝずい。下愚の人まわ。家〳〵学〳〵ん〳〵ろうい。学びしまとゝ。ゝ教をまとわかば学来なかぶ者〳〵てやむ也べ〳〵。ものわ。也こゝもゝ〳〵てやすんハ。第一の事や西大まる教学上人。猶のゝまわ眉白く深り徳たけ多ゝ。ゝまるまをまて。内二裏へよ

いとさきうまるとて。西国寺内方にあるを
こうとのにて。れやとて。信仰のきそく
あわれなるべし。資朝ゐくはをまんて。夏のよが
こうよりはとやはれ。後ねにおく犬おく
海おく〜〜走ゐ〜〜だてて。毛げだるを
ひかもて。此事色さうとて〜〜みしてゐ
とて西府へよい〜〜もし〜〜れしかけるとぐ
ゐ兼方内さの道めり〜〜さ〜〜れ〜〜。武士ど
もうち囲みて。六はゐ舟へゐくりたれば。
資朝ゐ一緒わ〜〜ゐて二神をんてあれ

浦山し。世うあ〜〜ん思ゐ。〜〜こもあ〜〜
まり〜〜ゐしとぞ〜〜いれこまる
此人本国のいて。あすやどりきれうり
はるに。〜〜やものどまのつまゐ新ゐ。
をもをもをもどちゆずみうらうんうて。ゆづ
〜〜も不具よ〜〜やうゐまるとんて。をぐ
にさどひあゐ曲未ゆ。尼妻をるよまを
をとさのて。まもゐ始まるゐ。ゐどて
を〜〜與つまて。ゐんすを〜〜いずまを〜〜学〜〜ん
まぐ。だぐまゐよゐづ〜〜しゐ〜〜ゐゐ

ぶ——ぶ——ぶとおりそれで。浮ひ——浸。此
ちうへ水がぬる——。こしもやうよ曲わるを
来て。自をよろこび——めぬるハ。はわるれ
び毒するあわ人わと。興ま——あるのどけ
きば。絃わうへ——れ人る水どます。指わわ
ま——ま——ま。さまるこぬべまるや
世にきづりん人ハ。歩機嫌を去べ——。
ついでぬ——きるハ。人の身ますかれハ
ま——ぶひて。ちるまるび。はやうのわわ
ゐ——ぶ。但病をうま。子う——。

死ぬるのみ。機嫌なり——ぶ。ついで
ぬ——ぶ——。ま——。ま。後。異。腐の
うつわらみる。家の火るハ。ふけきはのあれ
ぎりあがぬ——ぬ——。ま——。ま——もどこ
わ——ぶ。——ぶ——ちにを。こまれゆくものや。
ぎきバまを後ようけて。ぬるしをを人を
思りんるハ。機嫌なりふぶ——ぶ——ぶ——の
ようひわ——。ま——をみどぶむすぶ——きや。
書ま——のら夏ようあわ。ろいて——秋の
——ふるハぬ——ぶ。ま——ハぶて夏ま——ま

ものよりして。夜よりかゝ晩よりあがいらるゝ。秋の
月。小菊の天竺牡丹。
と書くまつ。梅まつぐみぬ。米の葉おお
るゝ。まづ前てめぐ出するあぐ小さ
まぐさ。つるうり。摂ずして。ある。
ものゝ気。下にすゝきるれよ。やちる
つゞくるすやし。生大病死の猫まる
夏。又見ることうつゝ。事ゝ家宅れる
ばいでゝあり。死ぬつゝでものゝ。死ゝ
ようしまゝ。ゝゝ。かゝうしろ

ものゝ人。死ぬうを出てゝ
ゝと書ゝ。ばるゝ。ゝずして
まる。おものひるゝ。ゝ
家みゝるゝめ
おゝ火鍋ゝ。ゝ
をこまゝ。事ゝる。
三餘度ゝ。ゝ
るゝ。ゝれるゝ
あゝゝ。ゝ
ゝ虎のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ぶ。樂器をとりまはる
ばかりなり。盃をとりまはす酒なり。
はいとりまはしどうとうをおのおのはい
必ずにおれてまるかりすまに基基
感ずとあらべのべ。あのべはすは。墨
敷に一句とりまはしば。何とかまはす
文もあれゆ。幸分まして多度の酒を
あらべむるもあり。かりみはすは文を
ひろげばべまし。ぶ。はるまきんや。
見ぬ者ぬ。ぬ。ぬ乃基。ぬ文ぬをあ
ひさと。仏あにありて。どとしとと孔孔
さべば。意ろうらみます。基業なのづづ
ぬもべし。基孔のいさなづづと。縄系に座
もば。芸えずして禅仏をあべしる
理もとよかニ形べぶ。かおもーろあ
ざきば。内神ぬ三塾ぬと。志ぬべ不信を
づづば。あのぶて見とをこうとおー
盃のそこをはるるかいはいまと
女人ぬ者さおはしーに。凝當とや
ちるぶそこにこちるをつるやはらん

とゝ浦一ぶ。はまいあゝず魚道や。
流なのこゝてゝに発つきくるに至るとゝ
ぐ。ゝとゞおおゝゝ浦ゝ
あゝあたゝびとゝふい。紙を発びうけたる
ゞ。蝶とゝふ見に似しゝゞゞふとあるやん
ゝ。ゝゝゝ人あゝゝゝれます。みをとゝふを
あやまゝゝゝ
門に額ゝゝるゝゝうとゝふよゝゝぬにか。
島嶼中小浦二品浦ゝ。額ゝゝるとの
ゝゝびき。ゝ物の横ゝうゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ。ゝゝゝゝゝうゝゝゝゝゝゝゝ

かひつりて。世のうちをそこなはすまて。戸
ひらつまてしめさだ。家をたもつはの
のちをのれもいりて。こゝてこめ〳〵さ〳〵へつ。
こゝろしはるゝをそれ。おどろく〳〵し〳〵
きこしまるは。なうらわ〳〵やて。人よつげ
〳〵さだ。村のおのこどもおこりてのそをる
み。大ぜいどもよりあつまる中に。法師
すゝりておのをのもとこゝろしれば。
此法師なさ〳〵こゝよりわ。母聽へおし
〳〵かくおこゝろをにはりあるとゝ頭うあるを

もて。基盤もゝしよりわ。基後方四方。
はの當のはしをん法やしまる
太衛法太の字。点うつうゝびとゝふる。
陰陽の友ぐ〳〵。お論基本をまくわ。
もちろの道や法しい。吉平が自筆の
合文の裏ゝ〳〵を法刻の
ようあ。点うらゝをまおうとやゝき
おの人あひあふは。彩色も點止するゝう
ま〳〵。おゝ法あう。をまをとあうう
おかゝに世ゝ道の法人乃

はせ詣り自他共に有難おもく失あらく敬をく
あり。こゝ神なのるる時。ぐびのいと世。
道のあるまゝとふ事をしば
あづまの人お赤の人よ交りあるこの人
の者妻にりてもをるを。又寺お少
を解きぬる顕家の僧。すぐ〳〵我俗に
あゝぐして。人なず。れるんぐるし
人るのいとまみあくるかぐをみるよ。者
のいと雪仏と出つゝ。をるめに金銀
様迄ばらばらとをこ。豊なるてん。
をるよ似るが。をのまるをまもゝ。よゝ
安堂してんや。人乃家ありとやんゝ
おども。下より湧るこも。雪のごとゝある
うちに。いとまみおつる甚多し
一道に来る人。あゝぬをの刈ろ
よりぐみゝ。表力ぐをまゝおゝ。ぶ。
くをゝに乃伯ゝじ物をいひふま
思へる。者のしもまれど。よにやろを
見ゆるも。をゝぬ道乃浦ひ番おぐゝば。
あなうらやおし者どかあゝはばちんん。

とゝしてあわれんぶ成者を産出て人
にあゝそふ角あるもの角なくして
けゝ牙あるもの牙をうみいだすことも
也人としてこゝに善よおあゝぶ也とあ雖
えばるを恥とゝ他にまけることのある
は火をもて失也居ながらすてゝ才義
のすぐれあるまてゝ先祖を忘まても
人にはゆまおとをおとる人ゝとゝ云
業をおこすこゝろいかゝ也内はよそこ
ゝのぶおゝ法ゝゝゝ見をかまる

ハ一。をこすまみゝ人にもいけるを
わざこれをすゝ自ゝゝ比惜いも
道を深よもじぬる人ゝみづゝあ
きゝゝてゝ浅はるれに志学ゝ惜
ずして孫にゝよ伝るうきゝ
自老ゝゝ人の一あ事すぐれたる才のゝ
ゝ比人の後まゝ祖ゝよろゆゝりんをい
ゝゝゝ老のゝゝうどゝてゝいけるまゝづゝ
ゝゝ。さゝあれど。ゝまゝ神ゝ
にのあゝ。比。比ゝ事すて者ゝ人ゝも

ゑとゝゆゝとバやゝ
あわてんゝ大ゆハ去おゝ
いひちゝまいさゝぶのオ
ときこゝ。あのづゝあやまわあぬべ
しし。ちゝのゝ辯へ去ゝゞいて
ゑゝぬゞ。すゝして。去ゝぬる去ゝ
ゆゞゝ。おゝ。ゝゝまねべゝを
あゝぬ人のいひきゝすゝ
ゝゝ。さゝあゝゞすゝ
ゝゝ。やゝあゝ。ゝ傷し

何ゝの式ゝとゝふゝ。後曙嘩のゝゞ
すでゝ去ゝゞゝゝを。をゝゞゝゝふ羽
まゝゝと人のやゝ。ゝ。建ゝ花乃
右弟大夫。後名院御庄のゝゝ。又
うゝゞゝみゝゝゝゝゝゝ。世のし
きゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

も第一に心を遣ひ〜べき事のるさりつ
て時とうつをとづれの為益あり。ひと
りしばにいりんもやろし。ばの形成あ
あんおい。中くろ乃よりをまいてん。
おいうで。心すゆうは。まりん人
のつまぐるまていまり。ろおいの系
にまるいりんに張るまゆるべ。
乃籍ゞ書き眼裡もるべまこもやをこ
ゆ〜あさよ人のまりて。のどうまゆるま
ゆ〜ろんつゆるいるよ。又もろ。

ゆ〜まこ〜はあゆゆ。びまゆゞりのもいたゆ
ことゆ〜ゆるいるこうゆ。
見びおらつ人の。我はまゆ人ゆるまゆびとまて
こそをんわる。て。人の袖乃ゞ繰ゆ
ゆまゞ用ゆ〜ゞるまにおゆをゆば人ま
おゆ川ぬ。ゆ〜おりの人い。陸ゆゞわ
ゆ〜ゆゆ〜ゆみ〜ゞゆ。て。ちゆまゞわ
おおわやうまれゞ。ゆゞうをおゆるゆ。
碁盤乃まゆまゆ石をて〜ゞ。ゞに。む
ゆれまゆ石をまゞゆ〜まゞ〜ゆ。あ

ゝゝゝ

はことをてゝ。昔の袖にやつれいはめるは
はのかすして。物もあゝうれ。ゆり耶
うゝ。さて。この志に。ねこよはじまるゝ。色
にはるゝ。物情よめゝ。りをつゝざよゝ
ゝ。百度の声。ゆ。祭り。命を失へるた
め。ゆゝ。ゝ。て。まおすゝ
ゝ。ゝんるゝ。ゝびゝ。ゝ。すまるゝ
おゝひゝて。ゝゝ世ゝゝゝゝゝゝ
をあやゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

すゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

大はは。道和泉より
小町ぶ。はのかまるゑ
や。ゑゑ。芝者さ
小屋にゑまる大。大福
屋ゑつかれゑまぶ。ゆ
屋ゑかろ〳〵ゑ。大につきゆゑ
るこゝゆ。深ゑ去や。人ゑあかゑる
中ゑ。道ゑゑのゝゑかゑ。気味ゑ
ゑゝ。ゑ宴の火ゑゆ。こゝびゑゑやて
こゝゑゑまろば〳〵ん人。ゐれのゆば
のまゝゑば〳〵ん。何ゑるゑをいゑまん。

なろゑまゑゝ人ゆ〳〵ひふゑゑ。ゝ一こゝ
火ゆまゝろゝをさ〳〵んや
世ゑゑ。ゑゑぬゑゑのゑゆゑゑゑゑゑ
ゝとゑゑゑ。ゑづ酒ゑゑゝゑて。ゑゑのゑゑゆ
たゑを興とゑゑゑ。ゑゑゑゑゆゝゑゑゑ
ゑび。飲人の影。ゑゑ。ゑ提ゑゑびに宿ゑ
ひゑゑ。人ゑゑりゑてゑゑゑゝゑ。ゑゑゑを
ゑゑゑゑゑゝゑ。ひゑゑゑゑゑゝゑゑゑゑゑゑ
飲ゑゑゑゑゑゑ。ゑ人ゑ身に旌人
ゑゑて。ゑこゑゑ。息災ゑる人ゑ。

目のまへに大ぜいの病者とまつて。お後を
をさへぶつふきまもいつてぶきはなどは。
はなのしうねづ——。あるはなぜ所い
ろ〳〵。ねぶりはなをひかり。はをくだて
ぶをうすして。ぬはのるをぶ。あをか
けわるをしの大ぜとのあてをぶ
とをぶ。人をしてうるめをんをるる。慈
悲をぶ。これは我をまそむをかのうきの
めうあれ——ん人。ぶ——ぶ——と
思はぶ——んや。ぶ園おうるをひあ
まりに。をうよ所人をるまて傳ま
——ん。あや——不思儀ぶおぶ
ぬづ——。人の上まてんをるぶたいう——。
をたのをるはまをにをし——とあ
人ぶ。おのふにをや——ぶの——をか。雨
おお——。えだうしゆぶみ。ひまりづし。
まぶたのうげて。ようい家家。
日本の人とを——ぶ。ぶハ額髮ぶをを
ろて家のやう。ぶばゆのび彩うらは——
げて。うちわ——ひ。ぶとてるをにとり海

まことにぬかはりなくてにはあ
てみづからもこの角ある山あり。夢
の振り出——て。名うのひまに。自老
こゝに法師。めーおさきてゐろくまのさ
ゐさまをとゝぬぞて。目をあてゝきば
すぐかゝまを。真しる人はべらーまま
——くゝまくし。あるハヌ。面をいみ
きるゐ。あくハくいくゝ云ゐる。あるハ
酸なさゝ——。小ぢさの人いのかのひはら
ひて。海乃布ゐまろろ——。恥ずかしく
いうゐるのみうきて。ルてハゆる法ぬぬどま
ゝ——ゐて。酸ゐかり為。馬車ゐか為
てあやまちーつ。ぬまの〜ぬをう。
大酸をゐろがひゆきて。ついひぢ。門乃下
なゐにひきて。みもいあるゐどもゐちゝ
し。自老加裏沙裏のまゝ法師乃
ゆわゝおのゝまをさゝ。やえぬるゐども
いてゝ。ゐろめきゝいるのハゆし。ゐる
るをーてゐ。世世も法のゆゐ為ゐべき
わざをゐらバ。つづいちん。世世まあ大まち

おの〳〵財と失ひ病をすること〳〵百業のなり
といへど酒の病ハ酒にあらずをこの神
憂わせるといへど酒に新人ぞ多すす
うはなをとり出〳〵ゑめる後の世人の
者恵ひこう〳〵ゑれ善根なやゝこと
失のごとく〳〵して悪をおし酒の毒を
破りて地獄よおつべし酒ととりて人
ゑ飲をたる人五百世の間人ゑ
生るとこゝ伝ハ法師ゑ
くらしおしとゆのゆ物ゑれど毒の

づゝ拾ひときおまるべし月の光
雪の夜〳〵ゑのなすてゑ
ゆゑ〳〵して面白しこゝ酒毒
そふるかぶやうれぐゝまるゐ
あのつきて夢ゑれ新まいあぐさ
む夢ゑれ〳〵〳〵あゝあゝゑの蓮の
中よりはくぶゆみきあぐ
新ゑれ〳〵さ〳〵出ゆれ
みそもばきこゑて失ゑて
てぐゝゑゑどちゆ〳〵

飯さるいとおの。藤のうち屋敷ひなど
まて。うけつまお何ぶ以さなどいひて。其の上
つゝ飯たるまおうし。いろういむ人の
主ゐ雇れゝかし。飯さるまいるよ。よ
を人ひ。ものやまて。とこひろ。上をゝあ
などのゝすゐゐもうれ。ちるづの
すゐ。衆人ひ。上戸まてひ。くと
なきぬる。又う神。ほをゝ人ど上ゝい
おゝ。ゝ罪ゆるさるゝ。赤ゆ。藤ゆ川て
あ出ゝ。ゝるに。とあるじひひあき
たるよ。おどひて。おるこるゝ。
おろ衆もどりは。おし。ゆまあく
ぶいぶ。まもひあ。ひてにぶ。ういい
ものすゝ。若うしろも。ものひ。おく
そなぶの。おど。おゝつきゝ
墨戸。小松門位ようをゝ。者
たゞ人に。おゝ。ま。時。ものあ
ものおゝ。ゝを。ゝを。ゝ。常よ
いるゝまをゝるゝ。ゝ彩ゝ
ゝ。ゝ。墨戸と
ゝふどう

鎌倉中ゑまして。ゆ
て後。まづ夜のかゝまのはつ
ちんと沙汰するはる。洗ゝ水原坂の道。
鎌倉くづを車につみて。おく〳〵とり
さかられば。夜にはれば。泥土のこゝ
ちよりふ。とり夜あんん用ゑあわが
しゝ人越じ。あへてかゝ。此るをある
ものゝ。ゝゝ出ゝりゝ。吉田中納ゝ
ゝ。夜をまなごのゝゝいやはうかゝるゝ
のゝまれゝゝ。ゝゝりきいみゝ

おもれ。ゝる鎌のゝづ。婦人ゝやう乃る
や。夜ゝ儀ゝ。ゝゝりまる人。夜ゝ
なごゝゝゝゝ。ゝ。冥ゝゝゝ
ゝに乃ゝゝゝ。内侍二の清神樂
ゝて人にゝゝゝ。宝剣ゝゝゝ人ぞ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ乃ゝ中ゝ。ゝ乃行ゝゝゝ。ゝ神
屋のゝ和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
典侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の家に沙門道眼上人、一切経を持ましまし
ゝ。ひぢ毛ありゝ。やけ野とゝふにな
ぬ墨――て。ことに首楞厳経を誦
ゞて。那蘭陀寺と号をゝ。堂のや
さきに。水ゝ多陀寺ハ大いみじきまち。
江州の説とて。こゝつゝへくるまゝ。西楽傳。
法顕傳などみまみしゝ。こゝにこそ。
江州はめるゝ才学ゝてゝやあれゝ。
学者ハ。唐土の西ハ。ひむき国
論なり。ゝゝ学

はぎちやうハ。正月ゝ。ゝ月ゝ。
ぬ。そこゝ院よりゝ。那須へおし
て。橋あゞるや。法ぬ説の池にこうゆ
まやもい。那須の芦を。いふや
みれくこゆき。角んバ乃ゆゆとゝふる。
よゝつきゝ。ゝれさに似ゝ神バ。松雪
とゝふ。ゝれ松雪とゝ云べき。あやまち
てゝんバのとゝふや。家のやゝ水のまゝ
うゝゝゞ――と。ある地ゝちゝき。昔よゝ
いひまゝ。てやゝ。ゝる地。おゝ

りてやうして。雪ふみわけ行らきはるよし。贈此典信ゞ日記に書くるの條方門を隆親ゞ。ちばけと云ものを供はるよりもしるしかけるを。つゝあやし。此物。糸ゐるやうあゝゞと人の手まるとやて。大門を鱧と云魚すいゝぬるゝてあゝにこあれ。鱧ゐ書ゞ何条ゐるゐあゝん。あゆの書ゞあゝのいゝ鱧ぬのいとやはれ今りゝ人はゝ牛ゐゞ角を巻ゐ。人ゝゐ馬ゐ

身をきりてゝのゐるしとゐ。ゐるゝをつけずゝ人ゐやゞゝ物ゐるゐ。ぬゝのゐゞせ。人ゝゐ犬をゞゐきれのふゞゝゞ。ゐをゐとゞゐゐ。ゐの物ゐ相撲ゐは頼ゐゐ。松下源左とゞゐはる。ゐをゐいをやゐをるゐゐまるゐ。ゐゝけたるゐりはうゞしのやゞれゞゐを。神戸人をゞゝゐ刀ゝして。ゐゐまりゝて。ゝれゝをゞ。をうとの物今日義経を。ぬのやいめゝゝてゐゝゝゞゐゝゞ。ゐゝゐゐてゐ

ず一男にハ〜もいりんはやうのるのおい
ひさる者よひこやさきくれば〜男左ゞ
ゆつにこもまのり侍〜ゞとて。あま
一ちづ〜ハ〜れ〜くるなを。ゆ我家格ハ〜ち
へいりんは。ハるゝ〜ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
まゞ〜ゝはゆもんゞ〜ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
やはれ〜ゝまゞ。左ま後ハさはくとハり
へんと出へゞまゞ〜ゝおゞゝハ。ゝゞとゝ。ゝて
ゝまべまゝ。他ハ被れ〜ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
一て用るゝゞ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

て出つ〜ん。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゞ〜ゝ〜ゝ。世ゝおさむる道後紛ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
下をゝまつ雑の人を。ゝまてまゝまゝ。
深に。ゝゞ人ゝあゝ〜ゞゝゝゝゝゝゝ。
陸陸奥ゝまふ盛ハ。ゝう。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ〜ゝ〜ゝるをゝゝゝ生ゝゝゝゝゝ。ゝ。
そゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

てゆきぬ。是ハ不ぶゝとしてあやまち
をすべ〜とて。の〜ばざるを名。とを去〜
ばゝん人。うゞの中をたれ給んや
吉田とや馬乘乃ゆ侍りしるとよ
こゝ事ものゆ。人のあ〜そぶべかゞ者と
おべし。のるべきるよ。よづよ〜ゝんて。
強弓に弱きにを去べし。次よ。遷物乃
具に。あやうゞゆ侍やあるとゝ〜ゝ。ゝよ
ゝるゝ。ゝ〜ゞ。をゝるよゝよべの〜ゞ。此
用ゝなゞゝ。ゝばゝる。ゝ馬乘ゝとゝやゝ者も

こゝ神ゝ祇ゝ蔵ゝ侍ゝ者ゝ
ゝ者のゝをゝ人。ゝゝの不堪者ゝとゝゝ人ど
も。堪能の非者乃人にあ〜ゞ時。者ゝ
ゝ者ゝ。ゝゆみゝ者ゝ〜ゝ。ゝ〜ゝ。
ゝ者ゝ者ゝゝ。ゝ。ゝゝ者ゝ自ゝ者ゝゝとのゝ
ゝ〜ゝ者ゝ。ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ。
大ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

因果の理なる事。法師などして世や
こゝろもつけさせおきたいたれば。教の
まに。法師はよるこんたあり。歩馬よ
乗事ひゝ。興車いまぬ事の尊
所に精ぎゝれんは。るまどもゝへにをこ
ゝろもんは。もゝじりまて為ちんは。
うるべしとさひゝ。次に仏るのゝち
酒などゝむるあゝんよ。法師は死
下に能をきい。檀那まずゝ思ま
べし。そて早し欲ゝ習ひゝ。

二ゝ方ゝ。やうゝはゝにのゝきばゝ
くゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。晴こけるなゝ
ど。法師なるべき。なまて。をよかな
ゝ。法師のゝまあずゝ。世るの人
まべて比るあゝ。ゝを能ゝ法るにて
て。夫をゝて。大ゝる道ゝまばゝ。能
とまつゝ。学問をまんとゝ来ゝゝ。
あゝまするゝどゝいよハの。まゝゝ。ゝを
ゝ思ひて。ゝとこゝゝつゝ。ゝゝは
あゝゝこゝ。自ゝ。おのゝまにのみまゝ

ぬる。月日を送るまぎれに。こどもたちまでもあり
まして。あ、老ぬ。後に世の上をまもる
まもる。思ひ。やうよまもるとも。時
きどきぬ。へさるに。新あらひ。さう
て板をくぶる。新のごとく。長へゆく。ば
ば。世のうらもあ。まもり。ん
るの中よ。いづれか。まのるとる。おりて
くべて。本の事を楽じ。ていて。
かいたをて。るよ。げむ。一日の中
一日の中。まもの。ん

もうよ。ぶ。ま。ぶ。の。まもん。ん。ま。を
り。まみて。ま。か。ま。ぶ。う。ち。て。く。大。る。
ま。り。そ。ぶ。べ。ま。や。何。ま。を。ま。ま。そ。ー。ま。に
に。ま。ま。ら。て。い。る。ま。ま。る。べ。ぶ。ま。ま。べ。
ば。碁。ば。う。う。人。ま。ま。ま。ぶ。に。ま。ぶ。人
ま。ま。ぶ。ら。て。ま。を。捨。火。ま。ま。ま。ま。ー。
ま。れ。に。ま。て。三。お。石。を。ま。て。く。中。の。石。ま
ま。く。ま。ま。す。ー。中。を。捨。て。中。に。つ
ま。る。ま。ま。ー。ま。ま。ま。う。ま。ま。ま。ま。ん
か。ん。ま。う。く。ぶ。ま。ま。中。ま。で。ぬ。ま。ば。お

しくまぶして。おのくまはりぬる石をも
のへまくし。是をもて搖ぶるをも
さくんぐおのゝ所にのぼりまゝこれずはをも
をうしまるふぐき道やゝ。京よりとむ人い
そぎて東山の用あかて。院にゆきつきくか
さくゝ。西山にのりくゝ。をくゝ道をはるべきるす
を思ひえくゝぶつゝよりはりて西山へゆく
べきやゝ。こゝすできつゝいまだ。此こゝをば
見りひてん。日をゆくぬるまれば。西山の
るハうちてえうさ。ゆくゝ。とおのふ

かよ。一時ばかり。高。すまの山の嶺。高
とあり。是をもてうるべし。一ゆびかを
ばかりと思ひぐ。過のるの破おくまをいるも
べかゝぶ。人の影をも恥べのゝび。ゆるす
みのへずして。一ゆ大るばべゝび。人の
あまるうまるゆて。あるものます
かをもゝ北すそやのまをゝ来をゝふる
あゝ。やゝのべの堅比ゆまと傳ゝ。と
搖りはるを。登蓮法師。を座を侍ゆ
ゝくゝやて。爲のゆゝんくるに。蓑うはや

あるこゝろ。ゆへ。は。舊のるゝあひに。わ
のべ。法華のげゝ。経さのゝ。ん。といひ。まるな。
あまわよ。物さは。げ。一。面。さて。こそ。人
行いひ。れば。世ゝ下。ゝ。ゝ。おの。ま。ま。おゝ。
當ゝ。物。ま。人の。あい。面乃。れ。ま。ゝ。ま。ゝ。
ものゝ。ま。面。ま。ま。ひ。ゝ。ゝ。ま。ゝ。ば。ま。
ま。ゝ。ん。ま。て。ま。ゝ。り。あ。て。り。ま。ゝ。ま。ひ
ま。ゝ。ま。ゝ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ゝ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

ま。り。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

きのうまで。なほうこのあるまし。指さぐり
ゆくのとおもふ。あのづゝこずめるを
あれば。はるゝくぬいぐるみ。ぬいぐるみ。
ぬるのゝ深すてしうぢまず
妻とふ物こそ。なのこゝろ指すぎ物
なるまい。ほも物ぢみるまでもなほ
ほすくられ。指ぐ指ぬぬこと。
又めるゝ女と如すへゝ。お宿をやつれば。
先不にぬをとちも雑をかぐぬしもあるる
ゆるぬとのゝとおりゝ

ぬゝゝめと。解ゝもゝ。なるゝゝまゝこのあの
ぬるゝば。此男をぞ雑うゝゝゝ。あつ
仙ゝよもおゐぬゝゝぬ。ゝとべさぐわにこう
と見ゝ思ぐ。おのして。あのうらぬ
とこるのおのゝるぬぐとに男。子をと
ぐゝまて。ぐ妻しゝぬゝうし。
男をゝまて指。ゐよぬゝまうち
ゝ新あの出。おぬ物をぞ指すぐ。ぐ
なるぬ成ゝを形者ゐうれんよ。ぐ
きをゝまゝうちぬん。ぬのあのあもの

にこそあらめ。よろづよりまづ、とくぐ通れ
をすんこそ。自分へ。とこそぬぎぐ
とゝもあるべ。あらはよきてとすや
ねさまどもんい。めづらしうりぬべし
家にのて物乃ばへさ。ふ人。ふとに
おゝ。美のものきゝ。ゆばつ色ゐし
も。夜のみあうめでゝ。くさ。まはゝとろ
ず。をこよまけこまに海まてもうさん。家い。ものの
屋ゝうこいのやゝまれはちうぞくいとよ。
人のたゝ家さ。家のいぶぞうよまは

よゝ。ものうひこまに。まゝ。ゝあうてやさる
用ゝこあるゝ。ゝ。よるひもものゝる
ま。ゝこ家ぞひまいめでゝきゆて
ゝよゝまうるまま家うちうて。ていきる
人の。をよ。ま。ゝるはすし。ゐ。ゝよ。
ゐれどらいとゝきゝゆんゐ人は。はをも
わゐ物まれば。ゝたうらまぬぎわ
学ぞけれ。ゝひ。ふつくろいすい
き。よ。ま男孫日。ま。てゆゐ。ゝ。ま家
ゐゝ。雑よまべりて。絵。て。彩ぬど

はるのてあるこそおのりの孫
神佛ゝまゝ人ゝまゝすゝでくぬゝ夜やりち
ゝゝゝゝ——
くゝき人の人よりもてゝ者をゝさゝか
と思りんゝはゝにあゝゝべゝゝてゝまゝ人
の碁うるゝゝに。さゝゝゝみまゝ。
すゝこゝの人の此義をゝまゝまゝまゝて。
己が者に乃ゝゝまゝて。碁の道のゝゝ
みゝ碁をゝゝ人の者ゝゝゝるゝんて。あの世
をゝゝゝゝと思りんゝる。碁ゝる碁りまゝる

ゝゝ。文字の法門。暗誦。神佛。ゝゝゝ
ゝりもて。あのれに者ゝまゝ思ハゝ。碁ゝあ
ゝゝゝ。あの世の境界ゝまゝあゝゝゝゝ。
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
達人の人ゝゝゝ根ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝまゝ出ゝて。人をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あか。又何とし心を付ぬ人あり。
入いはゝ芝居をゝゝゝ

もうかにてきゝ[illegible]れ[illegible]ぬ[illegible]
おしてあきらのさるゝ人者。まゝ[illegible]
我おもうんこと。掌の上の物をみん
がゆ一位うやうに撫りつゝ。佛
法ゆゑとなげ〳〵へ云べきなあらず
女人久しく縄を通りけるゆゑ袖に大
にきゝる人。未造の地ゆゑと田の中の水
なをしひらして。会比にあ〳〵れ[illegible]ゆゑ
ゆゑ〳〵ゆゑ。特衣の男二三人出きて。
こゝゝおりしおし[illegible]比人を見

ていにゝゝ。久我お内おゝ[illegible]ぞおゝ
しまる。義光におりしおしけるはい。
我世にやんるゝ人なておりゝゝ
東大寺の神輿。東寺ゆゝ宮よゝ將
屋の時。源氏の公ゝすいゝれけるゆゑ比屋
大ゝるてはたゝ[illegible]れゝゝを。出ゝ相国。
社頭なて[illegible]ゝ。ゝゝ
さきゝれば。ゝゝ[illegible]
ゆゑ。ゝゝ[illegible]
後ゝ作られけるゝ。比お国。ゝゝ[illegible]を

入て。西宮の社をこうさ
眷属共悪鬼悪神ども
神社すてゝおとたさ
あやとゞおもゝし
祇園の僧のみあ
論とゝふる。延喜式
系ちゞおやゝ
揭名分にのぞ
もあり。西宮
揭川行宮法
乃国ゝ。律の音
祇園すて。
長行い。
法海よ
によりてう
延九十乗
乗ふ。
中月を
ゞとうべ
もゝ文よ

ばつゝれし。
おゝ。
ゝ。
ゝ。

まのあたりに此ものあるう。此月美濃の神
達。大神宮へ参詣あるべき事ども云ひあの
どもの。をを法あり。はるるまゝ伊勢
まいりに参詣とぞ。その伺もも
し。十月法社のり。其年を例もあり
したゞし。おのれ不吉の伺や
勅勘おこり。勅のゝ法。そいこして
志ある人おゝ。を上の恨。天の世中を
はゞし。きはい。五条の天神に勅をう
ゝゝる。物るにゆるの神とふ。勅

かゝゝしうまる神や。おゝ法のの
負ある勅を。をゝ世に。ゝも。発れ。ゝば。
人出いゝ。此ゝ孫て後。この世のは。
身をつゝることにあり。老人なき
もをうつ時ハ持器なるもてゆれば
ゝる也。持器の抜をよる法。今
ゝやきを人去れる人ある。ゝ
此徹山。大門勧請の祀法とふる
は。為恵侍を出始めるも。祀法
とふる。法書ゝの沙法。

いすゝへ行墨代。すべて地獄文
つまてをこおハ〳〵敬いあまな。地代はるす
流布きたるや。又法会する次ゑ織な
〳〵ゑ。の物ゑまけゞきあるべし
德大寺右大臣。換逃げの日の當の時。
中いまて。皮廳ゑ神こゝとこあらきける
雑ゑ。女人ゑ兼ゞ生まれ〳〵。廳乃
うらへのて火理ゑ座のまゆの上に
のゞわてゑきうちみ〳〵神うゝ。
なもき性異ゑわらまて。生ゑ陰陽ゑのも

とつうゑとべまゑよ。名やまるな。なゑ
相國やゑて。生ゑ有りのまー。宮あれば
いづ〳〵へゑおゞらばん。甚弱のゑ人。ゑす
くゑ仕の術生ゑさ〳〵るべきやうまー
とて。生ゑびゑまへて。神ゑかけるた〳〵
みまびかへ〳〵生に生ゑ。あへて出るゑうち
けるとちん。あやー。みゑとゑてあやしゑ
ざるはい。あゑさ〳〵。えうて破るといへう
長山れゑて〳〵れ人をて。地びひゑきける
ゑ大なるゑうまは。のゞも生ゑびこうゑ

まもたる堀あれども。此に四郎まうと
いへてこと所をしりぞけ。ぐまと動ゆ
あれども。ふるくよりかの地を
ちかくなる物なれば。ちうさくちかくてこれ
ぐしと若人やゆれまるに。此おとぐ
人。まこと。ふまこん。無量なを建られん
よ何法たりなのまたべ。鬼神ふと
とそなり。ぐもぐ。ぐぐ。ぐぐ。ぐ

人の田を稲ぢるものゝうへにまきてぬ
さはに生田をうゑまゝれとて人を
つゝ一はるよ。先道をゝの田をさへ
うゑてゆくを。見こい稲じねの二ふよ
あゝぶす。いつにゝ一ゝもいれくまバうゑもの
ぶまを。こゝにはゝてまを。うゑべまをとハかを
ゝ稲ぢよ。降雨をんとゝまゝるを
まれば。いぢゝなゝ。発ばんとゝいひ
ける理りいとおもう。人々
奥さ多ハ多のものあ。ぢゝいをてあ

ちゆ鳥ゝゝ。はぢうまをゝるものを
あるゝゝゝあのゆまを。奥子多を時招
魂ハ法をびをこゝまるふ次ゆあり。二神ハ
鶏ゝ。方巻巻のゝ巻歌ゝ。妻多つを
ぶきを日乃をづゝけゝり。鶏香を奥
子多のこもはにうよをてきこゆ
巻をうハたのむぶゝび。まろうまを人
はゝ。ゝゝものゝ。ゆゝに。ゝゝいゝるを
あゝ。ものおゝあゝとてゝのむべのゝび。
こゝものゝ先なゝ。財おゝ。とて

べかるべき時のよう決定せず。才あり
て頼べのべびれさまはうあるべき。陸
あかりてあべべびあ新回まわ幸まわ
まず君の長なまべのべび深とうる
事迷や。奴さがへわとべべ。そ
ひきりる事ありす人の志をもるむ
べべびあ多ず紙まま頼べべず。信
あるるとあ。まを人よもこのべさ
きびるとる時はよるこび。恋まるとき
うみどを先右ひろびさべず。あ
後まをれば。墨ぶべまびきはいた
しけべろ。ふを用るる。ぶきして
きび。まは時は。物よはれあうれて
やべる。ゆるべしてやべべるる時は。も
も損びる。人は天地のふ。密や天地はかぎる
にはべ。人お性ちんぞそもちん。實火
すしてきいを発べる時は。喜怒哀楽を
さべべすて。物のたあるべべる
然は用は。びりべべきものや。
いゆる。ちを。用はべこ発あれて。ありて

わるばるん人ハ。元ハ[illegible]よりうるさきるや
はおのの大将に成まゝ時ハ。ゆ[illegible]
てはさむるなり。ゆ[illegible]けよかゝぐちに
うつきで。ゆれハこゝろびおちあやうし。
心ゆて。後をつゝしべきまゝ八幡のつ幸
に供奉の人。浄衣をきて。ゆすて後
をゆゝきとれハ。あるゝ戒の人。白衣
地獄をさるゆい決ゞ
ゆ[illegible]なもゝのゝ。ゆ[illegible]
ゆ[illegible]ぐ[illegible]ゆ[illegible]
趣[illegible]ゆ[illegible]ゆ樂ゆ。女男をこゝるれの

ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ。ゆ相府蓮。文字のゆ[illegible]
ゆ。ゆ。ゆ者の[illegible]候ゆ[illegible]ゆて。ゆにゆ[illegible]
ゆゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ。ゆ時ゆ樂ゆ[illegible]
ゆゆ[illegible]ゆ蓮府とゆ。ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ鶴
ゆゆ。ゆ鶴ゆて。ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ。
ゆゆ。ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆて。ゆ[illegible]ゆ。
ゆのれゞゆの[illegible]ゆ[illegible]ゆ
ゆ[illegible]ゆ朝臣。ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ。
ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ。ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ
ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ。ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ

行はるゝ。又は、まり
〳〵。直垂などのさまゝあるや。家あれ
ばこそやうまかとゝも。こゝとありしのば。
なべあるに直垂。うちくのまゝてまうち
わしにてうしようゝけとそへて。
てゝ。此酒をひとわうべんがはう
ぐゝにくれぬやはるや。はうかまうな
くゝ。人はこゝまわぬ。はうぬべまぬわ
あるとゝいはゝまでも来めぬとあわし
ぶ。こゝろゝはゝて。ゐきくまもめし

殺よ。堂二の棚に小太刀にみそのかし
つけいさるとん生〳〵。こゝ神ぞまあこれてさ
ゝるとやしうちばうそうちんとゝゝ。
よゝ弟献よ乃びて。興ようゝれ結やき。
て世ゝこゝそ結しのとやさきま
最初まるのこと。鶴岡の社系の次に。宮ゐ
元馬の道の神へ。先ん段を書して。ちゝ
きゝかけるよ。あゝじようゝくゝれうわ
けの掃一献にうらあてび。二献よこび。三献
にはいまらいまてやゝぬて。座する段亨を

夫婦隆辯偉云あるべし其の人にて
屋敷もよれくなり。さて毎年なる定
の隆物はもとゆひとやはれられば用
こしさとなるなり。久しこのあれ三年。
あるてあるどまに袖ふてうとなりて。
後につゐはれくなり。その時見る人
なりくやで情ずず。稽り侍しや
長大福長者乃云。人は美なはしを
きてひとつるは法をはくべきや。はづ
しくていはるるひとめるのみを人
も。徳をつゐんと思ひべ。をべくくやはづ
をいづひを時りすべ。をもと云ハ。
他ひとにあべ。人百常道のおりに
り任して。うちまを世を学を観ずる
あまれ。是本一の用也。次は美なる
の用をかるべくべ。人の世にある自他
ようくそに形先量やや。欲に陥くく志成
くを人を思ひ。百万お銭をとふとを。
形を任をべくべ。はる形やも時ある財
はくるあり。張りあり財成もちく。

ひがりあるべしと云ふ。次に
に所いなきばかりあるべし。
べき所無きときは。うらまれ
まうれば。心無きときは
ぬのごとくして。はかれもちゐるあと
云へば。あるべき貧者とおもうべしと。
君まごとくに非ずしてをれこうと
みべきことべもちゐるこもまれ。次に
恥にのぞむこうふとも。怒りうらむこうと
まうき。次に正直にして物をうる

まうべし。此義をよくりて物をもあん
人に富のまうるあるべし。
のこうぶれるに云ふべし。
強つもりてつきざる時に家財を色
をこもべし。あるいはのばず。に所と成ば
ざれどもいとこまへまもまへるこの
ヤを。非人に所をばぜんがためす。財を
求む。銭を財とまうるに所ひとりまふる
ず所や所にあるべきものをへば。銭あれど
もちゐるばかりに。食。貧。衣とおもうべし。

何をうゝ楽ひもちんぱ。此をもてハ。たゞ人乃
のあるじとして。貧をなゝ憂するつゝびとき
こしめ。欲をばじ〳〵てゝのーひとちん
よりハ。者のじ財をのゝんするを。癖泊ば
かも者。ゆゑ洗をてゝるのーひとゆん
よりハ。やきばゝんまいを。ゝにゝりり
てハ。貧富やをに明ー。寃者ハ理ゆに
ひゝゝー。火欲を世を欲ゝ似ゝゝ
孤ハ人にゝひつゝゝものゆ。堀川ゆて人
が。寝ゝる呂ハ。孤ゝゝ。仏和寺ゝて。

孤ばゝまるハゝゆをとおゝる下法門に。孤三
飛ゝりて。ゝひつきゝれハ。刃とあゝて
見をとゝるゆゝゝ呂。孤三王をはゝゝ。ひゝうは
つゝいゝろ——ゆ。二いすゝぬ。法門ハあまる
に〳〵孤ゆゝ。ゝとゆへ。おゝうゝゝゝ
や条黄門家ゝゝゝ。ゝゝ。孤欲は道ゝ
とりてハやんゝる。ゝゝ。孤ゆ。先日ゝまりて
元短之をゝいゝりまいて。長添者ゆ
まれハゝゝ。横笛のゆの穴ハ。孤りハゝのゝき
に。ハの法ゝるゝゝ。ひひゝゝゝ見ゝゝゝ。

本の穴は平調なり。次の穴は下無調也。そこつゞ
に錢孫調などゝ。上の穴は双調。次は
鳥鐘調なり。夕の穴は黄鐘調也。
其次は鸞鏡調なり。中の穴は盤
涉調。中と。のあいだは双調あり。
やうなるに律呂一律をあてゝ。五の
穴のみ上五孔は調子なきゆゑ。去り
もちゝ。ぐるひとをのべう。其音
不快也。あしバ此穴は吹時。あの〳〵おけ
あへぬ。然ハ物にあり。ぐ。吹うる人あり。
とゞき。科学のいろり沼ふ奥あり。歩進
後世をそうるとゝ云こと。此ありまりと
伝やき。他日に楽世の技ゞ中ハ。笛ハ
去〳〵べおおもてゝ。ちらしまバ。こゞ吹ゞわせ。
絶は吹。なゞ〳〵ゆゑのうらうまかつ去〳〵べ
もてゆく。ゆゑなまバ。穴ごとに伝於上に。
惟骨ゆゑ。こゝをいゝ。五の穴於
みにのぞ。ゆゑ。ひ。ゆゑのゝことゞわもはゞ
むゞ〳〵あ——〳〵するけバ。りづまの穴も
ゆゑかゝゞ。上ゆハゞれまゆ吹あて。

呂律を知らぬまでなる人共もゞ
や。殊に失にあらずゆゝしき業
何るも色出ハ賜はるゝうらゝかなれど
も。天王寺の舞樂のゝ。赤に恥ずも
入へ。天王寺の僧人の門徒ハ。當寺の
条いよゝ園を言べあるもて。ものゝ
乃めでゝもゝ乃ち侍るる。かゝるも
ずれうつれい。天王寺の時の園を侍る
をまうもとゝ。ハ時堂のおの鐘
まつ。其寺黄鐘調のもゝ。宮ゝ暑
ゝ侍ゝてあゞつ侍ゝ。ゞかゝるべきれに。二月
但繁會よりの重。密會よりの中なを
指南ゝ。秘蔵のるゝ也。此一調よりも
てゝゞれまゝ言ゝもゝ。ゝ侍るまゝと
やき。九輪のおゝハ英雄調まるゞ。
是先ゝ。ゝ調子祇園精舎の世常住
乃毫まつ。西園寺の法鐘。黄鐘調ま
いるゝゞし。ゝゝ。あまのゝ。ゝ
ゝまゝゝまゝばゝ。ゝ園よゝ
しゞのいゞれゝ乃ち浄土剛院黄鐘

みを毒。み畫鐘鐘鐘ゆ
遠江の女房共。奈の日の敷光いつけ
物に。こゝやうなる紺乃布のみ角んま
こ馬をつくりて。尾髮をとうじみ
をして。こゝもの井如のさる水平まつりて。
歌の心をいひて。やうわしこと侍ま
見及び侍しなど。無あてきこゝいち
まてをう侍しのを。光たる道志どもの。
そゆもゝ侍るゆ。比比いつけものゝ
と見て。見こゝもおかるまちて。ゝ

のちまに紫物をおおく侍りて。光右の袖は
人にもゝてみづのゝおこをどもゝび。
ゝものつきゝゝしむるを撫ぶ。ゝ書し
仏は乗形。東二條院へまゝれうゝ
まるに。亡者の追善まい。行るう侍ま
おのまと者さゝ。物ゝ侍ば。光の言ゝ。
宝殿不能物在とゝやさゝうゝゝを。ま
子どまいゝてゝハやゝ物まるぞ。会佛ま
まのゝるゝゝゆゝゝゝすゝとゝ。まどゝ
物ゝまぞとアゝれば。安ゝ宗まれゝ。さゝそ

やはらかしうちかつれども。よはゆく私
なるべき福に陥りて巨益あるごとく
祝る。極文ばかりの乃ばゆ。何ぞ
そもそもてこゝを所にぐ。つゞやはんと
て。なほのゝ〳〵かゝるよつまて。此さ云
他乗乃なびやつるやとゞやはれける
多づ乃おおいどのハ。主名さゞ君也鶴
ばかれ拾けるゆへとやハ陥るや
陰陽所こそ宗の道。鶴者ようのゞち
て。言すゞてまりゝず。よづさ一〳〵。

此毎のいゝづゝにひろをゝと。海よし
ゆきべらゝあるものハ
ゆ。とよるものハ
うみることなはゆ。おろそかなる殘
して。拾ふけにつゝちおへと。はめ侍
ます。深にのしの地をまづゝよなのん
ことに。道まるまるまるち。ふ物。當殺
などをうへなゝでし
ゝゝ久ゆゞやまるハ。通憲の道無のゝ
乃中に真ゝるゝどゝまおゝてゝ。ゝそ
神所といひ久るゆに教ゝまゝをゝ。

白き水干はうすきぬはゝ烏帽子を
ひるのゝかゝれば。おとこすがたいとゞいひ
ける。法門がもしはあちづのと云ける。此義を
とつゞけ。是白拍子の根元也。仏神祈願
縁とうたふ。其後。源光りあきくのる
をはりをまなび。後鳥羽院の御世也。
老尼寵にをしへさはぐるとゞ
後白河院の御時。信濃守行長。琵琶
古乃琴あわゝくもしず。楽府法門論語義の
書よやさきて。七徳の舞をまうこと
うかゝさば。五徳の冠者と異名をつけよ
まるゝ。ふうまるすして。学問をとゝて。
道世をこりはるを。無学和尚一義ある
ものをば不覚すでもめしをまして。不法
なるはあれば。此信濃のそこを抜抜
しかゝれ。此りをもの道。平家物語
と世間ゝ。是なるといへ。ゝる有用に教
てわゝせ。ゝかゝ。さて山ゐ。ことに
世ゝしかゝ。九郎判官の子ハ
ゝゝ去て。まのをゝ。蒲冠者去て

あいよく〜さへばつけるてのや。あく〜おさめでもまたる——もり。武士のるゆ
るのかぶは。生仏本国おしものまて。武士ま
同ヤてらもたやや。ほせ仏ず生れつきの
あるまとこの琵琶法師は学びさるや
六時礼讃い。法然上人のかまま安楽と
いえまる僧。弥陀文とゆめて造りてつとめ
ま志ゆ。其後大まふ基観房こつふ僧。
ゆしまものを宗て老ゆまおもり。一会
の会仏の最初や。後醍醐院の代よゆ

りゆおれ。法るす讃と。ゆゆく基観房
まゆめさるや。ゆむの歌題会法ハ文永
の比。めもの上人はまよりじめ〜れゆ
ま事のゆこハ。ゆしまるまの刀を法のゆと
ふ。妙観ず刀はいさ〜たゆず
立条内裏まい妖物まるゆ。若方内ゆ
ゆ〜れは。は。度上人ゆと黒ゆまて
基ばうらはるに。ゆ法蓮をゆ〜げ〜ゆる
物あゆ。ゆゆんむ弟ゆまば。私人のやう
ま法ゆ。ゆ〜のぞきたるを。あれ私

とゝ。ぞこよやれ〳〵おどひすげにくふ。京練
ひ抓だけうんじ。ふまるうこを
うの〳〵ゆ當のそこハ。はうるさ庵丁来や。
ある人のもとゝすてゝいみ。き鯉ないゞ〳〵
さかくれハ。拾人ゆの當の道の庵丁をん
ゞやと思へゞま。〳〵やこ〳〵うらいでんもい
の〳〵ゆ〳〵ゆ。ゆ。別當のことゆる
人ゆて。比雑百日の鯉ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆてき〳〵れゆる。ゆみゞ〳〵つきゞ〳〵

ゆ〳〵。ゆ。ゆて人ゞゆゆゆ

やうにとりあつまるを。深よせれど
も。ものごとこゝろゝとなかるゝを
よし。人は物をさゝるものたるもつゝ
て。身をまゝ人を云ふらるゝの志や。
勝むこゝ——てこゝ以れんと云ひ。勝負の
負わざにとつけあどーこゝるもつゝ
すべゝ人は世者先能をるべきものや。
ある人の子の。んぢまるあーゝあが。
なのあまゝ人をいふて。まゝの文を
ひまゝわし。はつしてきこゝ——っ

どゝも。尊者のおまてふ。はゝどもと。芸
えしや。又ある人の神まして。琵琶法師
乃ぬゝをきゝん。て。琵琶をめーよも
さるに。どうのひうおちゝわーゝぶ。泣りて
つけよと云に。ある男申をあーゝの
ずゝんぬるず。古きひはゝの柄あやをど
ふをつれば。ふをおーしゝう。琵琶
をどひゝに。ゝゝゝ。法師の琵琶。其
沙法をあ乃ばぬ。ゝ。そこにいひゝる
よーつやとゝゝゝ。ひさゝ

汐桶ハひもの木とうやうにて。よくぬ
れなどゞう。ある人作り道ばた——いるれ人ふ
よこてのるもとゝくみしかろ〳〵ゑんゆるせ。
美景とゞあ〳〵——と思ひ。何るすま
おゝ——あつて。人ばわるずうやく——
ゐ。こゝ塩をくまつゝんるさ——。更
女老のあれはる人こうこゝ稚ばまち
とたやくかるちるもの人ぶ。こうるぶ
——あハこゝまゞこゝ。こゝつあゝもの
や美ふるゞの。ふるもるゝ生ふ

めきに入あゝて——家——て。人ばない
すゝ——ろにまゝりあり
人の物をやらに。きゝずゝもあゝゞ。
ありのおゝいいんは。おこゞまゝ——とるや
ゆまゞまをやうにえんわおゝたるよ
ゝあるあか。こゝうゝあ。あぶゞ
ゝと思ひてやゝもゝんゝ又おゝゝよゝ老ぬ
人もまゞのまゝゝんゝう雅ゝうよいれき
るゝゝんは。おゞもの——くまこゝあ
ゝ。人きいまゞまゝ乃ばぬるをを力ゞ

きかへまゐらせ。さてそれ其人のるみは
おしはかるべからいひやうもなければ。あま
まるものあるにのるべき。とゝーぬーゝされ
りやうこそいづれ。世まるわぬる
あまもまの。おのづからやまもまあるもり
もあれど。光おもちゝぬやうよ。さたも
さゝん。あーゝるべきことなれ。うやう
なあまいものきれあ人のまるるや
ぬーゝまあまる。まのづからまた人。おも
おまゝゝゝまあーゝ。あゝじーまるにまも。

頭行人ぶかまちの。拍子ゝろうやう
おぬめ。人びとゝもゝまゝのべ。にえどかふりも
まあ。おのまゝ。あまどぶんをーゝぬゝもち
まあーゝのや。又鏡まるゝ色かゝもち
あまれに。まのべまゝうる。鏡
うゝ人ゝまゝあーゝおーゝうばうつ
ばーゝおー。屋やよーゝ物ぶいる。面ふ
がまゝろまよ。今このおうしまやまにまり
ぶのまゝ。ゝゝとゝーのーゝまるやあゝん。
ゆめーあーゝまーゝうば。身のうちに。

いつも年のこしらえのをつくづくと
拝ませ。おがみと云に大社をうつして。
めでたくつかまつる。きどおもまず
とうやおもふ。おもひまげ。秋の比堂塔上人
其ほかと人あまたはうをうして。いざゝゝ出雲
おがみに。うたいあちいめさんとて。其し
てうの名に。名をねみ〳〵。延〳〵
信おこしてゝ。おのゝ柳子まつ。
そもさうしろはさにこちらうれば。
上人はいとゝ延ドうてあまめでゝ。此

柳子。こちやういはめづらしゝ。うの家れ
めゝと涙ぐみ〳〵。いうり屋石碑
乃事は。はは覚じ。ものめずらや。先ゝまず
もゝへば。名あやし。みて。浪よ他にも
まつりくれ。赤乃はるにかゝんまず
いふ。上人まま系しゝ。ぐて。ぶもまし
名を地ちぬで。彼赤ゝ赤まよまず
て。此社柳子の。てゝれやう。ひて
神。ひあることに。伝ゝ。ちと。まり
どやといれくまば。ものまよ。さが彼

わるはべるるの仕りけるとの性にしたがせ
ていはしまして。はへるをしていまされば。
上人の感涙ながしづつまかにくり
返りまゆるものハ。そはは接接
物にしるべまつるや。巻巻物をばしてさの
にをまして。未のあいだよりの紙れのをを通
ーてゆひはしに紙をまして仕まつる墨
さるをこころのずよしと。三條右大臣殿
仰ぜられき。勅願ゆしの物のおの能を
ひろ〳〵うつまたて〳〵さるよをうまるる

あ。接接にをへ〳〵れ仕はや
仰ぜをあが自讃。して。と箇条を
ものめまるるあ。接馬義さもること
あるるうどやや。其人をおりて。
自讃をあもりを
一人あまるつれて。ものあるさます。
最勝光院の色まて。なのこるるよす
ーーさむるよんて。と二疋馬ばは
まるものあ〳〵ば。馬ーのれ〳〵義べ。志
ゞーにあるとてとまるとまるに。又る

をはしらとゝむるにはまて馬をひきまゝ
にして。乘る人法法の中まろびのを
羽のあやまくばるるを。人あれ越ば
一當代いまゞ掛まおりまゝ比。
万里小路殿にまゐ。堀川大納言殿
白張——はしゆゞうしへ。用あり
〳〵糸りうしまし。禰宜のの立六の巻
とくひろげおて。こゞと法にまて。長
の朱うゞのゝを悪あを云文ばゆ覽
ばかさまゝ。あうて。うあなは勝ずを
ばかさまゝ。はは勝ゞ。おはれぬや。おゞよゝ
ひゞみゝゝ。ゆりるまて。来るまうと。
おおを殺るゝ。九の巻をそこくの程
まゆ。あまこう殺し
とゝゝ。まてすいるゝ
況ゞゝ。巻の子まれど。者おは人は
いはゝゝのるまもいみゞゝ自讃し
たるや。法名九條おこのに。袖と袂
かゝ一首のうちゝ。あゝうちんや。
宣おゝいゝ者おおもゝれ多うり

秋の暮れ方なれば、もとゝ心ぼそき
ものゝ哀れ、袖ぬれぬべき人を
偖はれば、何ゝ方さしてゆくべき。やさき
なるまで。時々あるべきわりて。哀歌を
吹き道の冥加まで。言連やまで。
もゝ〳〵ならし。なら侍るまで。
九條相國伊通と哀歌状まで。こと
なるまの題目まで。好のもて。自
隨もゝ〳〵神〳〵
一 寺五重塔のつき鐘の銘。五兼て

の筆法。明香好臣清丸して。いつ
さうつさまんとも。きして。きりのこと
は草を如出〳〵。あれも侍しよ。のの
かに夕まで。白〳〵れば。老百里にきこゆ
と云白あり。陽唐書顔とんゆるよ。
百里あやまりのもやうもしよ。〳〵ぞ
ひをとりける。なのわが言名まちと
て〳〵。筆去殺神へいひやりたるに。あや
まて侍かくの。歌りとまゝ侍るで
と返り侍りき。取りまゝまゝべまゝ

よう。いろいろ歩のはの。見来るし
ありまぶ不安。あはめるや鐘四立
歩不安や。さぞ〳〵やゆるいや
一人あまり友まれて。三階廻れの事
侍ます。横川の学行堂参うら。
強義院とうけるゆる来額あり。仏理
ひぶのあれどうぐ〳〵びあり。いまど決
もずるや。信ふうと。堂僧るゝ。番や
侍ます。りぶまぐ〳〵ば二重おあるべし。
流理ありばぐ〳〵ぶきぐ〳〵び。といれ
うわに。二重ハ書つもう。西の窓うて
りぶもげまぐ〳〵ぶ。のぐ〳〵まのごとして。名
見侍ます。りぶ位署名字。自号。
はぶぐてみ〳〵侍ます。人指真よの
一 那智蘭阿寺まて。道限重法曼荼羅
ぶハ災と云るぶ云れ〳〵。見やあぶ〳〵
ぶるといたぶ。に他あ見ぶしばう
してうぶまりぶ肉よう。見しるやと云
おしるまぶいみぶ〳〵感じ侍ます
一 貫ぶ侍ぶに。あまるして。あ指真みぶ

凡信一ハ、いまだ[illegible]りそ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]に、信[illegible]
[illegible]て[illegible]て信一ハ[illegible]。陳[illegible]が[illegible]て信[illegible]
みくび、信[illegible]ど[illegible]ど[illegible]へ[illegible]て、まとめは
[illegible]る。同じ[illegible]る[illegible]大衆[illegible]て。
[illegible]ものあ[illegible]ず[illegible]ひて、[illegible]
てい[illegible]り一[illegible]。あ[illegible]び[illegible]
[illegible]ま[illegible]おり[illegible]ま[illegible]ま一[illegible]
[illegible]。[illegible]て[illegible]
一二月十五日あつき[illegible]。[illegible]
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]

[illegible]ひ[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]て、聽や
し信一ハ、優[illegible]る女の海[illegible]人
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]て[illegible]
[illegible]に[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
[illegible]ん[illegible]と[illegible]ま[illegible]。
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]て[illegible]ば[illegible]ち
[illegible]。其後[illegible]ま[illegible]の。
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
[illegible]ま[illegible]人[illegible]ま[illegible]
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]。信[illegible]

と根ぶかゆる人ちんあるゝらのよしなり
出しさるに京よりこゝをいはゞ信濃
やてきぬ此るゝ陰よりさゝ清ゝいはは
藤女の表ゆつゞはれ内よりか人の
はゞ覗じ去おて。さかゝるゆ女子とつ
ゝうゝてゝいぶしはて。びんゝゝ云云
除をどうゝんものぞ。ゝゝ糸りて
やゝ與あゝん。てゝ。りゝはゝくるゝどゞ
八月十五日。九月十三日。妻宿也。此宿
清水きおかゝ月を眺ぶよ良衆ゝを

法の山の陰の谷のゝ蔭のゝ蔭のゝ蔭ゝゝふ
の山ゝもゝる人ゝげゝゝんゝ。ゝかゝゝ通りん
ゝの色ゝゝ。ゝくゝゝゝ。ゝ表ゝおゝゝゝ
乃。ゝゝしゝゝゝゝゝもゝおゝゝめ。おゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝん
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まて　まつ　こんや　おさよ　何るりさま　おさよ
どうぞ　ちのまま　なんぞ　月のつゝはなを
ふこと　ゝ　ゝ　ゝ

よもやまのばる雑ハ常住平生をけ
ゐるなり。生の中にあるゝ成じ
て侍。家にとを隔ちんとおもふ。
病ばうまゝ死いとわけぞむ時に形一ゐも
ばゞ。ふかれまゝて。夏月の懶怠ば
時て。ぬこゐるゝ。ちまりて家をまゝ
ゐもば。家をゐよつぎて。此るゐ。を
こゝゝびばじてんゝ。ゐれをおこゝゝ
めど。おてをもちゐきば。こゐみまあゝず。
如みゞゝこそぬ。此さゞひのみあう
あゝめ。此ろ。ろくゝりそぎはうゝおゝ
でしに形をばじて後。ゐあって。道
よゐりんとゞば。に形つゝゞびめ。初の
生の中に。何ろをちゐ。ゐ。すゞゝ。ゐ
ゐ。ゐ趣也。に形ふよきゝゝば。ゐいまゐ
すゝ。おて。ろすをもまゐゞゞび。ゐに。ゐ
るを。ゐ下ゝて。そをゐむゐゐ時。さりゐ
ゐゝ。に此まて。いまゐ。ゐゞゝゞゐや
ゐゝこゝを。ゝ。遠此ゐつゝゝゝゐり。
ひゝへゝ。若樂の。ゐゐや。ゐゐ。ゐゝ。

妻をもつまをおぼえ。身をこと来るとこゝにあり。しかるに欲するに二にハ心也。名に二種あり。内ハ才能と才芸也。二ハ人々欲。三ハ味わ。此の内ハ内ハ心三ハ志ゆゑ。是顛倒の相よりおこりて。いろ〳〵の迷ひあり。もしあばんとハ者ハ

ハ身をかし人。又にかゝ云仏ハ。あるいハ物すのゆゑんとハ。又が云仏ハ人其者ハ。あるやゆゑ。又問人ハ何と。て仏に成ハ。ゆゑんと。又仏の

者に。ハ。いかゝ。ハ。ハ。ハ

這兩拓吉田兼好法師遺拓〻自筆歌
暮春筆寫情者也頃泉南亡羊之士
貧踞洛〻草庵而抵李老〻唐無
說莊生〻自逸且以晦日對三子戲海
要加之仍將以命於工諸於梓而付
夫三三子矣新句讀情閑以下俾予糾
之予坐好其志亡忘其醜卒加校訂而已
復恐有其遺逸也

慶長癸丑仲秋日

光廣

国立公文書館
National Archives of Japan